「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ー広島をどうとらえ、どう教えていくかー

（５年計画の２年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科

大野　　新・小澤富士男・篠塚　明彦

丸浜　　昭・宮崎　大輔・宮崎　　章

吉田　俊弘

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ー広島をどうとらえ、どう教えていくかー

（５年計画の２年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科
大野　新・小澤富士男・篠塚　明彦
丸浜　昭・宮崎　大輔・宮崎　章
吉田　俊弘

要約

昨年度から始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の研究テーマとして、社会科では第一次に継続する「科学者の社会的責任を考える」を掲げた。また、プロジェクト研究では、「『科学者の社会的責任を考える』授業作り」を掲げた。昨年度は、今年度の広島実習につなげるため、原爆を取り上げた授業実践を報告した。今年度は実際に高校２年生の生徒をつれて、広島実習を実施することができた。本報告はその実習の記録である。

キーワード：科学者の社会的責任　広島　原爆　社会科学習　ゼミナール　平和教育　フィールドワーク

１　はじめに

昨年度の論集において、中学校地理的分野および高校日本史分野において、原爆をテーマとする学習がどのように実践されているかについて報告した。その内容は11月に開催された本校教育研究会でも発表した。

今年度は、具体的に広島実習を行うにあたって、参加する生徒をどのように募るかを考え、高校２年生で現在実施しているゼミナールと一部リンクさせることとした。以下に、ゼミナールの概要、広島実習の報告（生徒の報告および感想による）、まとめを述べる。

２　高２ゼミナール

「科学と戦争のかかわりを考える」

（丸浜　昭）

2.1　今年度のゼミのねらい

社会科のプロジェクト研究テーマ「『科学者の社会的責任を考える』授業作り」をうけて、今年度の地歴担当の高２ゼミナールで「戦争と科学のかかわりを考える」の講座を開いた。非常勤講師の田中行義氏とともに実施したものである。次の３つのことを意図した。

① 核問題と７３１部隊の生体実験のことを中心に共通の学習をおこない、問題提起と意見交換の機会とする。

② 高３の「テーマ研究」につながるように、生徒各自がテーマをもっておこなう研究を進めはじめる。

③ ＳＳＨの研究とも絡めて希望者を募って広島フィールドワークを実施し、核についての学びを深める。

2.2　ゼミの実施概要

この講座を選択した生徒は23名であった。学校暦で定められた土曜日に、以下の内容で７回の授業をおこなった。

１）ガイダンスと学習「マンハッタン計画から原爆投下にいたるまで」―生徒の研究テーマ探しにつながることを期待しながら、映像をまじえて丸浜による講義として実施した。合わせて、広島フィールドワークの紹介をした。

２）学習「日本の戦争と科学技術―米国戦略爆撃調査団報告を中心に」―田中氏が、米国戦略爆撃調査団報告書の紹介をしながら日本の軍部の戦争観の非科学性について講義をした。

学習「731部隊の医学者たち―ビデオ視聴をまじえて」―731部隊関係者の戦後のあり方を追った映画と新宿区戸山で発見された「謎の人骨」報道番組を視聴し、現代につながる731部隊研究について丸浜から問題提起をした。

３）講演「戦争と科学の関わりを考える」―講師は本校の卒業生である下坂英氏（科学史・東洋英和女学院大学）で、以下の内容が話された。

１　普仏戦争の敗北後、パスツールは、戦争のため

Discussing the social responsibility of the scientists in the classroom what was Hiroshima, and how should we teach it?

に科学研究への社会的支援を強化することが必要と訴えた。

2　日本における脚気研究と陸軍と海軍の対立、日清・日露戦争では何が起きたか

3　ノーベル賞化学者ハーバーは、なぜ積極的に毒ガス開発に携わったのか。

4　第二次世界大戦における戦略物資としてのDDTとペニシリン

5　冷戦下の宇宙開発競争を指導した二人の科学者、その数奇な運命と思い

生徒が自分のテーマを見つけるための一助とすることをめざした。

4）生徒の報告「研究テーマの検討」―この段階での各自のテーマについて、簡単な報告をおこなった。

学習「731部隊の医者の責任に関する常石敬一氏の提起から考える」―丸浜が、常石敬一『731部隊』（講談社新書）に載る「専門職業人」をめぐる記述（P194～P196）に関わって問題提起した。また、田中氏が、ここで引用されているブレヒトの戯曲『ガリレオの生涯』について紹介した。

5）生徒の報告「戸山人骨問題からみる731部隊」―

生徒のグループが、新宿区戸山の陸軍軍医学校跡地から発見された人骨の問題が究明されていく経緯を中心に、731部隊について報告した。中学生のテーマ学習「731部隊を学ぶ」と合同での開催だった。

意見交流「731部隊にかかわった医者の戦後のあり方を考える」―前回紹介した常石氏の提起についての中学生と高校生の意見を紹介した。

6）生徒の報告「広島研修旅行」―夏に実施した研修旅行に参加した９人の生徒が、研修内容と感想を報告した。

7）生徒の報告「研究テーマの設定と進行状況」―全員が、問題意識と研究の進行状況を報告した。

なお、３学期末には、明治大学生田キャンパスに残る陸軍登戸研究所のフィールドワークと、その研究を行っている渡辺賢二氏による学習会を実施する。

３　広島実習報告　（大野　新・丸浜　昭）

3・1　事前学習

広島実習に参加を希望した９名の生徒を対象に、事前ガイダンスを行った。昨年論集で報告したように、中学校1年次の地理学習で『空白の天気図』を用いた授業を展開しているため原爆の概要は把握していたが、あらためて被爆当時の状況を理解するために資料を配布した。

加えて、広島市立平和研究所の水本先生より紹介のあった以下の文献等を事前に読んでおくように指示した。

・山田克哉『原子爆弾』講談社ブルーバックス1996
・中沢志保『オッペンハイマー』中公新書1995
・肥田瞬太郎，鎌仲ひとみ『内部被爆の脅威』ちくま新書2005
・林重男『爆心地シロシマに入る』岩波ジュニア新書
・松元寛『広島長崎修学旅行案内』岩波ジュニア新書

3・2　実習の概要

日程：２００８年８月６日（水）～８月９日（土）
行き先：広島県広島市　引率教員：丸浜　昭・大野　新
参加生徒：２－１　宇野将至　小林宗太郎　西岡宇行
　　２－２　河合隼雄　宮沢哲
　　２－３　池田悠太　開出雄介　佐藤薫
　　２－４　篠原健

3・3　主な行程

１日目	午後	広島記念平和公園　平和祈念資料館見学
	夜	灯篭流し見学
２日目	午前	放射線影響研究所　広島気象館見学
	昼	広島市立大学平和研究所訪問、広島女学院高校生との意見交換会
３日目		ワークショップ「広島原爆痕跡をＧＩＳでマッピング」の実施（午前中フィールドワーク、午後地図作成）
４日目		自主研修

3・4　生徒が記録した旅行記

１日目（８月６日）　午後　　担当　宇野将至

１２：２０　広島駅着
１２：２７　駅前で写真をとる
１２：３５　市電に乗る
１２：４２　八丁堀で降車
１２：４６　旅館に到着
１２：５０～お好み焼きやさんで昼食をとる
１４：１５　爆心地着（島外科）
１４：２２　広島記念公園（原爆ドーム）着
１４：３５　原爆ドーム前の川沿いを歩く（当時人が飛び込んだ）灯篭流しの会場でもある
１４：４４　平和公園に入る
１４：５６　原爆死没者追悼平和記念館着

中には検索端末があり、原爆で亡くなった方の名前

などを入力すると写真などが表示されるコンピュータが５、６台並んでいた。内部は物静かな、どこか悲しげな雰囲気に包まれていた。この日の夜のミーティングで西岡が言っていたことだが、クーラーのきいた半地下のこの建物から出て、熱気の中階段を上りながらセミの声を聞いた時、何か感じるものがあったという。言葉にうまくできないが、私も感じたし、皆感じただろうと思う。この感覚との遭遇は、一つこの旅行の意義だったのかもしれない。

１５：１３　広島平和記念資料館着

各々回り始める。時間をかけるもの、早々と切り上げてしまう者、それぞれであった。非常に多くの人がいたが、外国人の多さに驚いた。おそらく大半が欧米の方であろうと思う。日本人としては非常に見学にエネルギーを使う資料館なのだが、彼らはどこか涼しげな表情である印象を受けた。外人にも、原爆投下を事実として認識することが義務であると感じている人がいることは確かだ。彼らが実際どういった感情を抱いたは、もちろんわからないのだが。

１６：４０　見学を切り上げてふらふらうろつく。

１６：５８　ヒロシマ大行進を見た

若者がのぼりを持って行進している。どうやらここは彼らの目的地だったようだ。「東北大学」などののぼりも見られた。核と戦争をなくそう、といった主張であるらしい。

１７：３０　全員そろい、出発。集合写真をとる

１８：１０　食事（～１８：４０）は美味しかった！

１９：００　灯篭流しを見学しに行く。多くの人が原爆ドームそばの川沿いに佇んでいる原爆ドームの周りには、ろうそくがいくつも灯されている。近所の小学生が作ったものだという。特に厳粛な空気があるわけではなく、皆談笑している雰囲気。もちろんそれでもいいのかもしれない。ただ死者を悼む気持ちは大前提だと思う。決してレクリエーションイベントではないはず。

２０：００～ＮＨＫスペシャルを旅館の部屋のテレビで見る

２０：５０　ミーティング開始。

一人一人今日の感想を述べていく。西岡の感想は先に述べたようなこと。宇野は外国人が多かった事に関して総じて平和記念資料館と広島記念公園での散策に関して感想をぽつぽつと漏らす。明日は放射線影響研究所に見学に行くという。それ以降怖い話とかしてた。

一日目はこんな具合で終わった。広島に行ったのは初めてだったのもあり、得るものは多かった。

資料館で見た写真などはほとんど既知のものではあったが、館内の雰囲気と相まってなんとも深い印象を与えた。だが日本が、あるいは世界がこれから核についてどう向き合うかはまだ見えてこない。とにかく現地に赴いて自分の足で歩けたことは非常に有意義だった。

＜１日目の感想＞

広島旅行で感じたこと（篠原　健）

８月６日、広島平和祈念公園を訪れた。百聞は一見にしかず、生の体験は何事にも代え難いものだと思った。教科書の写真でみる原爆ドーム、テレビで流れるドキュメンタリー番組、それらどれよりも、今、ここにいる、というのが強烈に心に響いた。公園内には原爆に関する石碑が多く点在するのだが、今回はその中でも強く印象に残ったものについて話したい。韓国人原爆犠牲者慰霊碑である。原爆供養塔の近くにあり表には日本語、裏にはハングルで説明が刻まれていた。原爆被害＝日本人と捉えがちだが、当時の広島には多くの朝鮮人もいたのである。むろん彼らも被爆した。その数は約二万人と言われている。けっして見過ごせる数ではないだろう。しかしこの石碑は当初、平和公園の外にあったそうだ。そこに差別の意識がはっきりとあったとは言えない。だが、「原爆で被害に遭った外国人」という視点が日本人に抜けていた事は確かだろう。朝鮮の方々の要望もあり、1998年になってようやく石碑は公園内に設置された。広島平和記念公園は原爆の被害の無惨さを日本、そして世界に伝えていく場所だと思う。そういった意味でも原爆体験を日本人固有の物にしない事も大切だと思った。

写真：公園内にある韓国人原爆犠牲者慰霊碑

広島平和祈念資料館について（河合　隼雄）

僕が広島平和記念資料館で得たもの、それは単なる知識ではなく、まさしくイメージだと思います。単なる知識だったら、ただ教科書を読んでも得ることはできます。ただ、原爆について知り、考えると言うのは多分それだけではないと思うのです。僕達は広島研修旅行で、当時の様子が再現されたジオラマを見たり、さらに広島の被爆地周辺の街を歩いたりしました。それらの行為は、ただ本を読むだけとは決定的に違うと感じました。実際に記念館を見て、周りを歩いて思ったことは、今まで文章で読みながらイメージしたことがいかにちっぽけだったか、ということです。放射線による被害、熱線による被害、爆風による被害などある原爆の被害のうちどれについても、本によって知ったものと資料館で知ったものは知識としては同じではあるかもしれないのですが、もっと深い次元で心に与えるインパクトなどについては重みが全く違いました。それは、広島に行くまでに頭の中に持っていた材料では、広島についてイメージすることが到底できなかったということなのでしょう。多くのことについては、文章を読んでそれをその通り頭の中で再現する、イメージすることに困難はありません。しかし、広島の原爆被害ということについては、文章を読むということと、頭の中で再現するということがずいぶん隔たっているように感じました。そして、そう考えたときに資料館というものの意味が、改めてはっきり分かってきました。広島の原爆被害についてのイメージが重みを持つためには、このような資料館は必要不可欠なのです。

このように多くのことを考えさせられたということ、これが僕が広島研修旅行での一番の収穫です。

２日目（８月７日）　午前　　担当　小林宗太郎

行程；　８：００　旅館出発
　　９：００　放射線影響研究所見学開始
　　１０：００　見学終了
　　１１：２０　江波山気象館見学開始
　　１２：２０　見学終了

入手資料;放影研見学に於いて７枚の資料を２部ずつ、計14枚、加えて放影研広報部からパンフレット「放射線影響研究所のご案内」入手。
江波山気象館に於いて２枚の資料を入手。

・放射線影響研究所について

午前９時から10時までの一時間の見学。一時間の内、前半30分はビデオ鑑賞、後半30分は所内見学に当てられた。ビデオ鑑賞、所内見学共に、放影研広報出版室の羽田氏が担当してくださった。館内のビデオ、又は、ビデオカメラ撮影は、検査の為、来訪中の患者さんの居る場所を除き、認められた。放影研は広島、長崎の原子爆弾の被爆者における放射線の健康影響を調査する科学研究機関である。放射線の人体に及ぼす医学的影響、疾病を調査、研究し、被爆者の健康維持に貢献するとともに、人類の保健福祉の向上に寄与することを目的としている。太平洋戦争終結後、米占領軍は広島と長崎で原爆の人体への影響を調査し始めた。米、トルーマン大統領による、米国原爆調査研究委員会が1947年３月、日赤病院の一室にABCCを設置。ABCCは、被爆者を中心とする、10万人の寿命調査、２万人の成人健康調査などを行った。後に比治山に移転が決定し、日米が費用を折半して運営する「放射線影響研究所」となり現在に至る。

・放射線影響研究所見学での着眼点（丸浜、大野、両教員より）

着眼点１：ABCC時代においてかかわった研究者はどのような者か。
　　２：内部被爆の実態とは
　　３：二重被爆（長崎＆広島）

押さえておきたいポイント

→ABCC、放射線影響研究所が今までに行ってきた被爆者に対する調査とは、米にとっては今後の原爆戦争の為の、調査＝実験である。一方、日本にとっては原爆被爆者に対する治療である。この両者の思惑、考え方、目的にズレが生じていることがポイントである。

・広島市江波山気象館について

広島市中区の江波山公園内にある気象科学館で広島地方気象台が移転した後の建物に設置、気象をテーマとした博物館である。

江波山気象館３つの側面

１．元気象台の側面：天気情報、気象情報が入手できる。館で独自に広島市域の天気予報を行っている。
２．博物館的側面 展示資料：旧広島地方気象台で使われていた気象測器、原爆関係資料など
体験型展示：「突風カプセル」「フランクリンの実験室」「タイフーンボックス」等、様々な気象に関する現象を体験できる。
３．被爆建物としての側面：昭和20年８月６日午前８時15分、広島市に投下された原子爆弾の被害を受けた旧気象台の建物はその一部が保存され、原子爆弾被害の様子を現在に伝えていた。原爆の爆風で曲がった窓枠やガラスの破片が突き刺さった壁に被爆の

痕跡を見ることができた。旧広島地方気象台は、原子爆弾と枕崎台風の二重災害に立ち向かう気象台職員の姿を描く柳田邦男氏のノンフィクション「空白の天気図」の舞台になっている。

＜２日目午前の感想＞

広島研究報告書（小林宗太郎）

僕は今回の広島研究報告で、放影研についての報告を行った。一人、10分程度が目安であった為、現地で得られた多くの情報や見地から幾つかを絞らせていただいた。報告した内容、流れは次の通りである。「放影研の設立から現在に至るまでの変遷」、「組織体制」、「諸問題」。「放影研の現在に至るまでの変遷」と「組織体制」については、放影研（放射線影響研究所）とは何か、何を目的とした組織であるのか、知ってもらう導入部分とした。報告に当たっては、現地入手の資料冊子、放影研の公式サイトなどを活用した。変遷と組織体制に於て、明記すべき事は、放影研の前身は米が組織したABCC（原爆調査委員会）であり、その目的とするところは「被爆者について原爆放射線の健康影響の長期的調査」そしてその一方で、放影研の設立目的は「放射線の人体に及ぼす医学的影響およびこれによる疾病を調査研究し、被爆者の健康維持福祉に貢献する。」いうことだ。報告の最後に触れた、諸問題を考えるにあたり上述した導入部分（特に僕が伝えたかった部分）が重要となってくる。ヒロシマ（広島）の負の産物とも言える放影研が抱える問題へのアプローチとして、僕は人権問題を取り上げた。ABCCの日本での名称と現在の放影研の設立目的を比べると明瞭である。当時ABCCはあくまで、被爆者の治療を目的としたのではなく、人類史上初めて用いられた原子爆弾がヒトに与える直接的、間接的影響を調べていたにすぎないということである。つまり、(これは、日本人特有の判官贔屓的視点かもしれないが)被爆者は、研究室で様々な変化を付されたモルモットのように考えられていたということだ。人権侵害を表す一つ事例として、調査対象者をジープで迎えに行き、無理矢理連行した、という事実を挙げた。これらの事から、ヒロシマ市民はABCCに対し、批判や反発を抱き、これは、日米共同運営も放影研になった今でも、消し去ることの出来ない事実であるといえる。纏めとして言える事は、様々な要素と原因からなるヒロシマの原爆問題を考えるにあたり、人権の尊重が特に重視される今日、放影研を見過ごすことは出来ないということである。放影研問題については報告会終了後に丸浜先生から、さらなる資料を用いて掘り下げていただいた。放影研についてさらなる理解とヒロシマ問題においての新たな見地が得られたのではないかと思う。

上から見た広島（池田悠太）

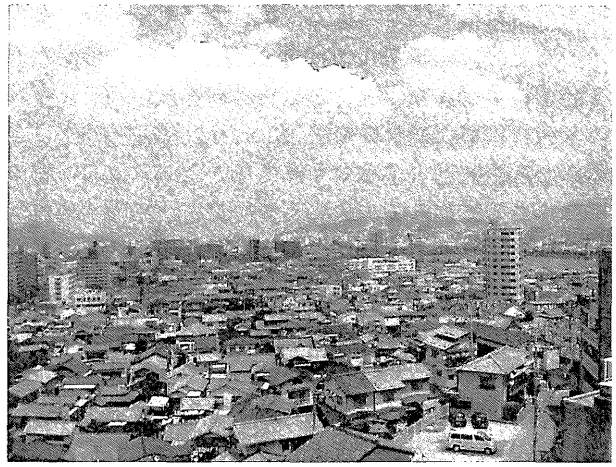
原爆というものの「大きさ」―これが、今回僕が広島で感じたことである。それは、広島から奪ったものの大きさであり、同時に広島に与えたものの大きさ、そして世界に与えた影響の大きさ、などである。今回の広島旅行の感想と、２年前に個人的に訪れた広島の感想とを併せてしたためたい。１回目の広島旅行では、現在の広島と約60年前の広島との対比が最も印象に残った。その時は、資料館や記念公園、原爆ドーム、そして広島市街を巡ったのだが、歩いていて、現在の広島は完全に生まれ変わった都市だと感じた。何も考えずに歩いていたら、「普通」の都市なのだ。資料などで知っている約60年前の風景を、現在に重ねようと想像力を多いに働かせれば重なる、という具合である。被爆建物は、どこにあるのか知ったうえで探そうと思わない限り目に入らないのではないかと思った。被爆建物の様子が簡単にわかるのは、原爆ドームぐらいであった。ただ、逆に、このことは現在と過去とが同化しているからだともいえる。このように、広島市街は、意図的に想像力を働かせない限り原爆の爪跡を感じることのない市街であった。このことは、逆に、約60年前は惨憺たる有様であったことを強調することにもなる。同時に、これほどまでに生まれ変わった広島にも、直接または何らかのつながりで被爆による被害を受けている人が大勢いるのか、と思った。２回目の今回は、広島が失ったものの大きさを感じた。１回目にも感じたことではあるが、今回の方が痛切に感じた。この差は、視点の位置の違いから来るものだと思う。１回目は、広島市街の内部に視点があったのに対し、２回目は、広島市街の外部に視点があったのである。広島市街を高いところから一望したのだ。「高いところ」とは、江波山気象館の展望台である。江波山気象館は、昭和20年当時は広島地方気象台で、爆心地から南3.7km地点にある施設である。爆心地から約2kmの範囲が、被害が最大級であった範囲であるが、その少し外側からその範囲を完全に見渡すことができた。爆心地の場所、爆心の高さ、きのこ雲の大きさ、といったことが目の前に広がる風景にぴったり重ねることができ、規模の大きさが視覚的にわかる。また、柳田邦男氏のノンフィクション小説『空白の天気図』の舞台でもあるので、そのエピソードからも移入が可能だった。今自分が目にしている広島市のほとんどが奪い去られ、そこにい

る人間、建物、社会資本等を一発の原子爆弾が奪い去ったという事実は、今まで頭の中だけで想像していたものよりも規模が大きく、失ったものの大きさを実感を持って考えさせられた。人口は当時が約35万人、現在が117万人という違いはあるが、眼前に広がっている一人間社会を一発の爆弾が奪い去るということは考えられないほど悲惨なことだと感じたのだ。核兵器を使用する人にとっても殺戮の場面は見えないし、軍の人間や核兵器について議論している政治家・学者などの人間は、殺戮の場面を知らずに済む。しかし、兵器の落ちた先には一つの人間社会があるのだ。このことを今回改めて実感した。原爆の場合は特に都市ごと奪い去るうえ、さらには放射能という後世にも残る甚大な被害を残す。

そこで、現在の核を巡る問題についてであるが、広島で感じたことを思い出すと、どうしても、僕は、核保有はなくす方向でいかなければいけないと思わざるを得ない。確かに、これは感情論であり理想論かもしれない。実際問題、核は勢力均衡に大きな影響を与えるし、各国が軍縮に歩調を合わせることは、難しい。しかし、ここで「現実問題」として諦める、すなわち限界を設けてもよいのであろうか。軍拡がエスカレートし、危険な兵器が大量に存在する危機的な状態になってしまうのか。短期的な解決は不可能であるが、長期的にみて何らかの方法はないのか、それを探らねばならないと思う。このことを考えるうえで、僕が広島で核兵器の恐ろしさを感じたということは大きな意味を持つと思う。

人間の心の問題としてこの問題を捉えられるとしたら、どうであろうか。ここでいう人間とは、指導者であり、そして市民である。指導者が変われば世界は良くなる、これはあり得るが、非現実的であろう。では、市民の側からも核軍縮はできないものか。一時アメリカの市民運動が軍縮に向かわせたという事実があることも踏まえると、市民の啓発、世論の形成というのは方法の一つとして存在するし、これは捨てられない方法だと思う。方法としては、例えば、教育がある。原爆の正義を唱えていたアメリカの学生が広島の写真を見てショックを受けている様子はよく目にするが、このことからもわかるように、考える材料を十分に与える教育を施すということはとても重要だと思う。心という内面的な問題なので、皆で共有することは不可能だとは思うが、少なくとも、考える材料は十分にある状態にすべきであろう。

この、核を巡る問題は簡単に結論が出る問題ではない。しかし、何らかの光を見出せないものか、これからも考えてゆきたい。



写真：広島気象館屋上から爆心地をのぞむ

２日目（８月７日）午後　　担当　西岡宇行

＜広島女学院との交流記録＞

・挨拶

各自自己紹介

高山先生（広島女学院）、水本先生（広島市立大学）、JICS（jogakuin international cooperation society）のメンバー

「学生だけが伝えられることを常に考えながらヒロシマで起きたことを世界や日本国内に向けて発信したいと思っている。」

水本　若いころ国立青年の家で教育大学附属駒場高校の生徒と一緒になったことがある。みな多種多才であった。また、この間筑駒で行った講演のアンケートやその後の在校生のブログから筑駒生の優秀さが垣間見えた。今日はいろいろなことを広島の学生から受け取ってほしい。

・JICSによるプレゼンテーション

・プレゼンへの質疑応答

筑駒生徒：署名はどのくらいの人がしてくれるのか

JICS：平和記念公園で実施すると９割位。やはり爆心地周辺は署名をしてくれる人が多いが、県内でも広島市から離れたところでは無視する人も多く、５割～６割程度。

筑駒生徒：プレゼンでアメリカ人とのディスカッションをしたと言っていたが、それはどのような内容だったか。

JICS：私たちは「核廃絶論」を唱える姿勢を取ろうとしたが、アメリカの人たちにとっては「核抑止論」が当然らしく、そちらの話が大部分でなかなか「廃

絶論」を唱えるのが難しかった。ヒロシマが世界に向けて「廃絶論」を発信してきたと思っていたが、うまく伝わっていないのかもしれないと思い、びっくりした。

筑駒生徒：平和サミットとは具体的にどのようなことをするのか

JICS：沖縄と広島の学生合同で平和についての理解を深めるなどの活動が中心である。海外の方々も参加する。

JICSから東京の学生へ

JICS：どんなふうに平和の学習を行っているんですか?

筑駒生徒：戦略爆撃調査団とかをゼミなどで。また、個人でも学んでいますし、学校では主に講義形式で学習をしています。

JICS：来てみてどうでした?

筑駒生徒：こんなにかというのが素直にあって、やはり教科書やその他参考にしてきた文献よりも学ぶところが多いです。東京の平和学習では避けられないことではありますが、核の危険性を一方的に教え込まれているという感じがします。

JICS：日本は島国だから戦う必要というものが他の国境を何国も共有しているような国と違って少ないから核廃絶論を言えるのではないか？インドはいつ攻撃されるか分からないんだからやはり持たなければならない。平和な国だから廃絶論を主張できるという風に言われたことがあります。これはJICS内部でも意見が分かれます。「抑止論でもいいけど、日本は持つべきではない」という人もいます。私は核に核ではきりがないと思っていますが、どうでしょうか。核廃絶論か、抑止論か、意見を聞かせてください。

筑駒生徒A：持つべきではないかと思っていた。特に北朝鮮などの脅威に対して、日本が無力で守るすべを持たないのはアメリカに依存しすぎだと思う。だけど、現地にこうして来て、多少なりともその痕跡に触れてみると、そういう合理的な理屈ではなく、そこで起きた実際の苦しみのなかで死んでいった人々がいることがリアルに感じられて、考え方が変わりつつある。

水本：抑止論抑止論というが、それが本当に機能しているのか、本当に対等な抑止というものが存在しているのか、僕は疑わしいと思いますが、それを考えていかなくてはならない。また、核をもつにあたっても、核兵器というのはほかの武器と異なる点がいくつもある。たとえば、ウラン濃縮にはいつでも汚染の危険が伴うし、それによる破壊も不必要に大きなものである。武器として持つにあたっては、軍事的合理性から考えてもあまりメリットはないように感じる。

筑駒生徒B：抑止論のほうがいいという人も参加しているようですが、それはなぜですか?

JICS：少しでも減らせたらいいなと思って。核が無くなることはないかもしれないけど、署名は一万人以上集めることができた。

筑駒生徒B：アジア人の学習って何ですか？

JICS：直接関係がないかもしれないけど、それが平和につながると思ってやっています。

水本：それに関してですが、アジアの人々の中には「おとされる理由は日本人がもともと作ったのではないか」と主張する人もいる。これは日本が太平洋戦争時に彼らにしたことを考えれば、そう言われても仕方がない。彼らは核廃絶を掲げるメッセージは受け取ってくれるけど、感情的に「日本」という国に反発を持っている。そして、私たちはまずこのような人々に分かってもらうためにはどうすればいいか考える必要がある。

筑駒生徒C：僕はまず、ひどいなぁと痛感した。しかし、核抑止論により保たれている平和が崩れてしまうのは僕は危険だと思う。それに、日本もアメリカに依存してしまうのはよくない。だから、武装って、物騒な話ですけど、何らかの形でする必要がある。

水本：実はこれについて一つ興味深い事例があって、みんな個人レベルでは、「廃棄したほうがいい」と言ってくれる人が大半なのだけれど、世論調査を取ると「もったほうがいい」も多いんですね。しかし、今、アメリカでもオバマ候補やマケイン候補はいずれも軍縮を主張しています。

筑駒生徒C：アメリカが核を廃止したら世界の勢力図はどうなるんでしょう。

JICS：アメリカがきちんとイニシアティブをとって慎重に進めればそう大きな変化がなく進めることができると思います。

筑駒生徒D：日本は宗教など、目立った信仰がないため、その要因で相手を憎む気持ちが分からない部分があり、だから戦争についてある種「わかっていない」とおもわれてしまうのではないか。

JICS：広島から発信しなくてはならないとおもわれることはなんですか

筑駒生徒E：平和記念館での展示は被害者よりではないかという人が広島にもいると聞く。しかし、この

指摘は僕はどうかと思う。戦争には扇動する支配者とそれに従う民衆がいるものであって、それは区別して考えたほうがいい。そして、それを区別した時、では国民の苦しみはどうだったのかということを考えなくてはならない。その苦しみは核というものがこの世に存在する限り、発信し続けなければならない。アメリカの核の傘に守られている実情がある。しかし、いつまでもそんなことをしているわけにはいかない。マケインもオバマも本当にハト派かどうか疑わしいし、アメリカに引きずられて戦争に駆り出されてしまう可能性もある。核の苦しみを本当に理解しているのは広島の人だけなので、何とかその人たちが日米安保の問題に取り組んだらどうだろうと思う。アメリカの大統領が変わるごとにびくびくするような平和は本当の平和ではないと思う。

筑駒生徒F：核を持っていたほうが理想的という論はあるかもしれないが、僕はなくす方向で話を進めないといけないと思う。そして、それを発信するべきである。理由としては、放射能が大きい。これはきわめて非人道的な効果であり、しかも、あとあとまで人々を苦しめ続ける。いま、平和のために核で抑止するという話が出たが、僕はそれはありかもしれないけど、長期的にはなくしていかなければならないと強く感じる。江波山のあたりの町が、一瞬にして皆無となった。それを見たとき僕にはひしひしと実感がわいてきた。この雰囲気、空気を伝えるにはいったい何が大切なのか、たぶんこの実感があらゆる人々に伝われば核は自然と消えてゆくものだと思う。

意見交換

JICS：平和学習を推進するたとえば私たちの様な会が東京にはほとんどないと聞きましたが、どうしてですか？作ろうとは思いませんか？

筑駒生徒：黙

JICS：広島の人しか分からないという言い方をした人がいましたが、それはわたしたちにも分からない。実体験したわけではないから。だから、そんな風に壁を作ってほしくはないんです。

筑駒生徒：そんなつもりで言ったのではなくて・・・

大野：筑駒の人はなんだかなまじいろいろ知ってるから、議論をこねくり回して結局いいたいことが見えなくなってしまっている人たちが多い。僕は高校生はその特権を十分に、たとえばこのJICSのような形で活用して、議論ではなく、積極的に行動していったほうがいいと考えますが、では、JICSのみなさんがそんな風に積極的に活動できるのはどうしてでしょうか。

丸浜：広島にいるのに、全然原爆というものが身近な体験に思えてこないという人がじつはある一定数いる。僕はどこかで自分に近い体験をしないとやはりこの実感はわいてこないのではないだろうか。変えていけば、変わる。いかないなら変わらない。僕も行動するJICSの積極性の動機を知りたい。

大野：さっきのに付け加えて、僕は原爆というものをなんとか伝えようと授業に取り入れてきたが、やはり授業には限界があったと感じている。特に「空気を感じてもらうこと」それだけは難しかった。そのヒントにしたい。JICSの行動原理と、学校ではどのような平和学習がなされているか教えてほしい。

JICS：学校でのJICSのイメージはたぶんあまりよいものではないと思う。実際自分はダンス部に入っているが、部活をJICSで抜けようとすると「がんばるね」とか「めんどうくさくない？」とか聞かれたりする。だから何となく負い目を感じていたが、実際署名活動をしてみると、とても多くの人々が署名に参加してくれた。その時、疎外意識を勝手に自分たちで構築していたことに気づいた。行動原理といわれると難しいですが、わたしたちがやらなくちゃ誰がやるという気持ちでいまは打ち込んでいます。何より、戦争がなくならないという状況はいやですし、幸運にも今は市民の声がある程度政治に反映される時代ですからね。

（そのほか、はじめは興味がなかったけど、ある経験を通してJICSの活動に参加したくなったという人が多かった。）

・むすび

大野：僕ひとつ疑問なのは日本には戦争博物館というものがしっかりとないところなんですよね。どうしてなんだろう。

高山：いろいろな意見がありましたが、私はなによりも、東京の高校生が、広島という地に来て、各々なにか心に感じてくれたということがうれしい限りです。核廃絶にしても抑止にしてもこういう小さな心の動きから始まるものかもしれません。

団長：JICSの積極的活動に心動かされました。ありがとうございました。

＜２日目午後感想＞

ジックスとの交流で考えた事（西岡たかゆき）

８月７日に僕たち地理歴史ゼミナールの有志一行は

広島女学院との交流をした。一日目に原爆というものを目の当たりにし、糊のよく効いた浴衣を着て、それでも比較的リラックスした一夜を過ごした僕たちは同年代と議論するというエキサイティングな企画を一人一人少なからず期待していた。ジックスの目標は広島という地に生を受けたものとして、また高校生として、核爆弾とはどういうものなのかを発信して行きたいということだった。しかしジックスの発表が他の高校生が調べた発表と比べて特別何かを内包しているかといわれると僕は大いに疑問が残る。高校生としてという物珍しさで最初の内は見てもらえると思うがどうだろうか。かと言って僕にその解決法を見出だせといわれると困る。より実体験を交える？違うと思う。悲惨な写真を強調する？多分おかしい。結局のところ僕が学んだのは実体験のリアリティというのを伝えるのは非常に難しい（というか、可能かどうかわからない）ということであった。無論原爆とその発信について、ジックスは僕たちの何十倍何百倍も考えているはずであって、にもかかわらずそれが広島公園に僕達がほんのすこしいってみるほどのリアリティとなり得ないのは当たり前のように思われるが、あらためてその困難さがありありとわかった。平和記念資料館のひんやりとした静まり返った雰囲気、次々と浮かび上がる無機質な遺族の遺影、壁のモザイクタイル。あの資料館には生命の香りがしない。階段からあがった熱気。瀬戸内気候の強烈な暑さが僕の頭にふりそそいだ本当に暑かった。この場に全身火傷で横たわる事はどんなに地獄か、ただでさえ水が欲しいのに。地面に焼かれはしないか［かわいたくちびるに干からびた目に］資料館の静寂は追悼をテーマにしているはずだがじつはおとされた瞬間はどうだったか、ほんの一瞬、なにもない時間がなかったか。ジックスも僕達もそれを考えるべきであると感じる。それには抑止論にぐらつかない感情的支柱（リアリティ）が必要ではないか。

広島に行って思ったこと（開出）

あらゆる事件には現場に行かなければわからないことがある。60年前に投下された原爆だって、広島や長崎に実際に行ってみれば、今でもその傷跡を偲ぶことができる。高校生のうちに少しでも被爆地の空気に触れることができたのは、それだけで大きな価値があると思う。

四日目か五日目、幾分見慣れてきた原爆ドームの姿をみて、こういう一目見て「平和」を連想させる物が毎日視界に入る生活と言うのは一体どういうものなのだろうか、と想像せずにはいられなかった。広島市民にとって原爆ドームとは一体なんなんだろう。もはや「平和」の象徴などではなく、公園の一建造物にすぎないのだろうか、それとも市の中心部に厳としてそびえる巨大な慰霊碑なのだろうか。こういうものが生活圏にずっとあるという状況を僕はうまく想像することはできない。原爆ドームは、広島市民に何らかの形で影響を与え続けてきているのではないだろうか、とどうしても思ってしまう。広島や沖縄の人々の平和に対する関心は高いことがよく知られている。さて、旅行中、広島市立大学の平和研究所で、広島女学院高校のJICSという団体のお話を伺う機会があった。彼女たちは、クラブ活動の一環として平和運動に取り組んでいるという。僕は自由対話の場で、考えていたことを喋ってみた。つまり、広島にいるからこういう運動につながる面もあるんでしょうね、と。すると、「広島のひとしか分からないという言い方をした人がいましたが、それは私たちも分からない。実体験したわけではないから。だから、そんな風に壁を作ってほしくはないんです。」（原文ママ）という答えが返ってきて、大いに考えさせられた。そういうものなのかな、やっぱり高校生なら、ぐちゃぐちゃ考えないで行動するのがいいんだよな、とそのとき思った。ただ、今の考え方は少し違うことをここに記しておきたい。簡単に言うと、やはり広島市民だからできる運動はあるし、実際に彼女たちの活動も、広島の女子高生というブランドをかなり利用している面がある。それは発言中にある「壁」とかじゃなくて、歴然とした事実なんではないか、なぜかというとそれは僕たちが何もしなくてもいいということにはならないから。広島の女子高生がやるべきことと、都会でぬるま湯に浸っている（とされている）中高一貫男子高校生がやるべきことはかなり違う気がする。だれでもただ運動すればいいというわけではないんじゃないかと思っている。それに、署名とか街頭デモを自治体の庇護の下でやることにどんな意味があるのだろうか。地元メディアは確かに喜ぶかもしれない。しかし、それだけで終わってしまうのはただの高校生としての甘えのような気がしてならない。これからの平和教育に必要なのは、「共感」と「未来」という二つのキーワードであると思う。広島の女子高生には、署名のような質より量で勝負するのではなく、もっと被爆者一人一人の生の苦しみを伝えてほしい。一人の老婆の苦しみをつづった文章は、何万人の署名よりも平和に対して雄弁であると僕は思う。終戦から二世代分経た今、あまり時間は残されていない。

「未来」というのは、そろそろ日本の安全保障政策を

教育プログラムの中で真面目に教える必要があるのではないか、ということだ。「原爆でこんなにもたくさんの人が死にました、こんなにもひどいことが起きました、だから戦争は止めましょう」といつまでも言ってるわけにはいかない。あまりにも抽象的だし、中国その他の理解を得るのは難しい気もするし、アメリカから日本の軍事における人的支援が求められている現状をあまりにも無視している。大半の人々が、オバマ大統領は、同盟国に積極的協力を要請するだろう、と予測している今、それに日本が引きずられて自衛隊を出すべきなのか、後方支援と言うグレーゾーンにとどめるのか、それとも自衛隊の派遣を止めるのか、きちんと議論して、一貫した外交姿勢を見せることが何より必要である。

３日目（８月８日）　午前　　担当　宮沢　哲

１．概略

この日は実際に広島の町を午前中フィールドワークの形式で歩き、町に現存・碑・案内板などの形で残る被爆の痕跡を調べ、午後地図に起こした。

２．趣旨

今まで点々と回って歩いた被爆の痕跡をたどり、それらを地図上に自分達の手でプロットすることにより位置関係を具体的に把握し、また被爆物であれば爆心からの距離と被害の大きさとの関係を実際に見ることにより理解をより具体化する、などといったことを目標とした。

３．当日の動き

07:30 起床
08:00 朝食
09:00 特設会場に移動
10:40 フィールドワーク開始
12:40 ３班到着
13:00 ２班到着/フィールドワーク予定時刻
13:05 １班到着

４．詳細

原爆ドームを中心に、原爆ドームより北、東、西の３班に分かれてそれぞれフィールドワークを行った。

１班(北)：西岡・池田(悠)・篠原
２班(東)：宇野・小林(創)・開出
３班(西)：河合・宮澤・佐藤(薫)

＜３日目午前の感想＞

８月８日午前：フィールドワーク（宮澤　哲）

広島の町を午前中にフィールドワーク形式で歩き、町に現存・碑・案内板などといった形で存在する被爆の痕跡を調べ、午後にそれをパソコンで地図上に起こした。今まで転々として歩き見たり、広島気象台などから見下ろしたりした広島の町、そして被爆の痕跡をもう一度自分たちの足でたどり、それらを地図上にプロットすることにより爆心地からの位置関係についての理解をより具体化することを目的とした。原爆ドームを中心に、北・東・西の3班に分かれてフィールドワークを行った。僕は平和記念公園周辺を歩いた。以下訪れた場所を列挙する。結構広島については１日目・２日目で歩いているし、東京でも他の人よりは広島に関する本や資料を多少なりとも目を通していたが、やはり実際に歩いてみると今まで気づかなかったことがあると実感した。

たとえばこれはフィールドワークの際僕が気づかず、帰って来て丸浜先生に指摘されたこととして、

①いつ・誰が作ったのか
②碑の大きさはどれほどか
③その碑はどこにあるのか、他の碑との位置関係は、周りにはなにがあるか
④誰を対称にしたものか
⑤その碑にはなんと書かれているか

といったことを意識して見るとまた違ったものが見えるということがある。つまり、たとえば在日韓国人被爆者の碑であれば過去に平和公園の外にあった歴史があり、今でも平和公園の隅にあることが日韓の関係の一部を表していると考えられることや、ほかにも広島市女の原爆慰霊碑において中央の少女の持つ$E=mc^2$という言葉が、当時プレスコードにより原爆に関する言動の自由が奪われていたため、原子爆弾を作るうえでの基礎となったアインシュタインの相対性理論を刻むにいたったという経緯を経ていることなど、一つの碑を見るだけでもそこからえられるものは大きい。これは広島に行った全体の感想として個人的に考えたことだが、やはり現地に言って見ないと分からないことがあるということを痛感した。

たとえば上のことについても僕はそのような機会がなければ気づかなかっただろうし、広島の町が原爆投下の後どのような状態であったかをよりクリアーに想像するには夏に広島に行き、暑さの中で広島の町を歩いてみないと人々の体験談というものがなかなか浮かび上がってこない。スポーツというものはプレイせず、いつまで経ってもそのスポーツの練習法やテクニックに関する本を読んでも決してうまくはならない。これと同じように、僕は広島に行くことにより、行かなか

った場合には得られなかったものを得たのではないかと思う。JICSとの対談の際、我々の一人が「広島の人にしか分からないことがある」という発言に対しJICSの一人が「我々も原爆を体験したわけではない。そのような理解の壁を作られるのは悲しいことだ」と言った。これはまさしく正しいことではあるが、たとえば極端な程度の差は時として性質が異なるかのような錯覚を覚えさせることもまた事実であるし、広島にいることによってでしか得られないものがあるということはむしろ前向きに捉えるべきなのではないか、と今回の旅行を通じて思った。

３日目（８月８日）　午後　　担当　佐藤薫

13時に集合し、それから午前中のフィールドワークを元に竹崎さん（中国書店・ＧＩＳ研究者）の指導の下、地図作成を行った。途中被爆者の奥本さんにお話をうかがい、最後に各班による発表を行う、といった流れだった。奥本さんのお話と各班の発表を中心に記録した。

奥本さんのお話の概要（不十分な点あり）

当時、自分は週６で黄金橋周辺の兵倉庫備蓄所に学徒動員されていた。その黄金橋で被爆した。そこは大体爆心地から４kmであり、爆風はほとんど感じなかったが、キノコ雲はよく見えた。それはどす黒い煙であり、そのまま覆いかぶさってくるのではないかという恐怖を感じた。市街地を家のほうに行こうとしたが入れなかったので、比治山のほうに行き、広島駅から友達と二人で尾長市（この市名は聞き間違いか？）の親戚の家に行って泊まった。その親戚の家は、少し傾いていたが倒れてはいなかった。だが、西の方からどんどん炎がやってくるので、安心は出来ず、不安の中寝た翌朝起きてみたら途中まで焼けて止まっていた。その後、友達と別れ、山すそを東照宮、常葉橋、広島城のそばを通って南下して、袋町を通って自宅の跡まで行った。自宅には午前７時から８時ぐらいに着いた。自宅は現在アンデルセンのある銀行の交差点の東側にあり、爆心地から400メートルほどであった。アンデルセンは天井は崩れ落ちていたが、怪我をした数人が中でうずくまっていた。本通り沿いでは、死体は目にしなかった。自宅の跡に踏み込もうとしたが、土とか灰とかの下が火だったので入れず、しょうがないので「ヒロシ健在」と紙に書き残して去った。交差点まで戻り、西に行くと死者がたくさんいた。黒焦げになった人や膨れ上がった人が多数いた。馬もいた。これはきっと軍隊関係だと思う。相生橋を渡って北に行き、三滝の親戚の家までたどり着いた。

父は宇品の方に逃げ延び、軍が大竹？に収容した。それを聞いて８月15日に会いに行ったらその日に亡くなっていったので、遺骨をもらって帰った。妹は建物疎開していたが行方不明になった。弟は国民学校１年と３年だったが行方不明になった。３歳の弟もいたが自宅の土の中から小さい骨が出てきたので多分それだろう。祖母は夜空襲が多いので、夜避難し朝自宅に帰ってくるという生活をしており、８月６日は自宅に戻る電車で被爆した。だが、無事であり、後遺症もなく、老衰でなくなった。原爆が落ちる前に自宅の近くの銀行付近が火事になり、銀行に燃え移らないように半径50メートル以内の家が全て取り壊されたが、自宅は半径50メートルを少し離れていたので大丈夫だった。その時は良かったと思ったが、今考えるともしそのとき家が取り壊されていたら、自分たちは疎開しており、被爆せずに済んだかもしれない。

その後のやり取り抜粋

竹崎さん：自分は被爆2世だが、家族からもこういう話を聞いたことはなかった。やっぱり思い出したくないだろうし話したくないだろう。だから、奥本さんに思い出させてしまって申し訳ない。

奥本さん：そんなことない。

竹崎さん：奥本さんは語り部でないのでお願いした。話すたびに脚色したりしていってしまうのは嫌だから。だから無理やりお願いした。

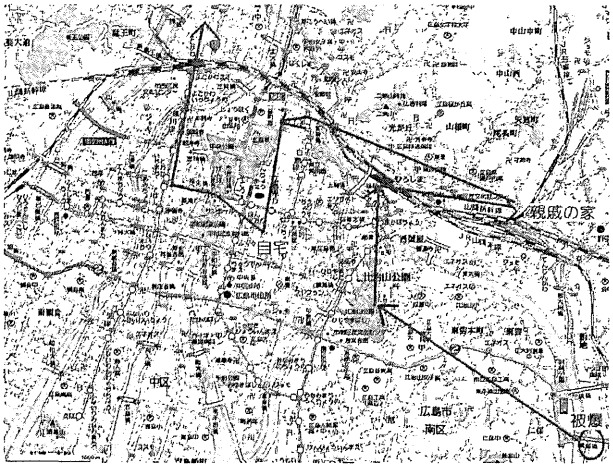
奥本さん：本当に無理やりだった。

竹崎さん:今までも何度かお話はしてもらっていたが、今までは自分は全体の反応とかを見ながら聞いていたのであれだった。だが、今日はこうして隣りで画面を見ながらお話を聞いて、改めて大変だったのだな、とわかった。うまくはいえないが、こんなことを思った。

奥本さん：ＴＶで後遺症の影響についての番組をやっていたが（８月６日のＮＨＫスペシャル）、自分は今のところは大丈夫だが、いつそうなるかと思うと心細い。そういう思いを抱えながら生きていかなくてはいけない。

竹崎さん：やはり自分たちが何かしていかなければならない。忘れられることがあってはならない。

奥本さん：戦争で被害を受けたのが広島だけではないというのもまた認識している。自分は別に語り部を専門的にやっているのではないので、記憶のみを頼りにやっている。あいまいな点もあったかもしれないが、ご了承願いたい。



（参考：奥本さんが８月６日、７日に動いた経路）

各班の地図作成及びその発表

地図作成は「地図太郎 GIS 入門編」というソフトを用いて行った。地図上に午前中訪れた碑などの場所や特徴、画像を記録し、それを元に各班発表を行った。

地図作成中に大学院生の方がされていたお話

自分も小学校とかで平和教育があってこういうところを回ったが、やっぱりだんだん意識が薄れていく。だから、こういう企画は良いとおもう。もしこういったことをもっとやりたいのだったら、「地図太郎」は3000円ぐらいで売っているし、もっとよいソフトも6万円とかで売っているので、大学に入ったりしたら使って研究してみるといいと思う。今は、google mapなど色々なものもあり、そういったものも使いようだと思う。色々と工夫して欲しい。

３班の発表　　発表者：河合

自分たちの道筋をたどり碑を一つずつ説明していく形式だった。中身については地図のほうを見ればいいとおもうので省略。

発言抜粋

「最初に道を間違ってしまい、南に行き過ぎてしまったのだが、そのおかげで事前に配布された地図に載っていない碑もいろいろと発見することが出来た。」

「韓国人の碑は少し新しいように感じた。」

その後のやり取り抜粋

奥本さん：「$E=mc^2$」と書いてある女学校の石碑があったが、あれは何故だと思うか。

河合：学問が今後このように悪用されるようなことがあってはならない、という事を表すために象徴的に書かれたのではないだろうか。

奥本さん：あれは本当は元々「原爆」と書きたかった。だが、進駐軍によって禁止されたので、代わりに「$E=mc^2$」と書いた。

竹崎さん：ちなみに、その「市女」は大野先生の出身校。

奥本さん：最近、平和公園を見学に来て、昔も公園だったと勘違いして「人が住んでなくてよかったね」などと言う学生がいるそうだが、公園のあたりはもともと一番栄えており、それが全てぶっつぶれてしまったのでこうなった。

韓国人の碑を新しいと感じたと言っていたが、それは元々碑が公園の外に立てられており、後に公園内に立てられたからである。それをめぐってはいろいろあったのだろう。

大野先生：もちろん何を見て回ったか、というのは大事だが、もう少しカテゴライズしてまとめていくことは出来ないだろうか。学生、外国人、地域、など対象によって分類していくともっとよくなると思う（地図上にどこに碑があるかを記号で表し、その記号の形や色によって分類をわかりやすく示すことが出来るのだが、どの班もそうしたことは行っていなかった）。

丸浜先生：碑がいつ作られたのか、というのは、専門家たちがどう捉えていたのか、などもわかるので、チェックしておくとよかったかもしれない。（なお、先に挙げた女学校の碑は、帰りに確かめたところ奥本さんのおっしゃっていた通り占領下の1947（1948だったかも）年に作られていた。）

河合：反省してます。

大野先生：反省する必要はない。次に生かしていけばよい。

奥本さん：短時間だったからしょうがないだろう。よく見て回ったと思う

２班の発表　　発表者：宇野

ここから、奥本さんの指摘により、発表の合間合間で注釈を入れていくようになった。

発表は、基本道順に従ってだったが、碑をすべて取り上げるのではなく、一部をピックアップして詳しく説明する形式だった。中身については省略。以下抜粋

宇野：アンデルセンなど先程奥本さんのお話に出てきたところを回ったので、お話を寄り深く理解することが出来た。

さくら隊のモニュメントがあった。これは本来「桜隊」なのだが、何故「さくら」とひらがなで書かれていたのかさっき話しあってみたのだが、きっと「桜」という字がナショナリズムと結びつくので止められたのだろうと考えた。

奥本さん：さくら隊のについてはきっとその通りだろ

う。「星」とかも禁止されていた。

奥本さん：国民学校の説明版の写真の中に赤十字の旗が写っているが、それは当時ここに病人を運んだりしていたからだ。壁は原爆で黒焦げになり、そこに当時チョークで安否の伝言など色々書いていたのだが、その後その上から固めていた。しかし、修復するときに壁の中からそれが現れたので、今ではちゃんと保存されている。

竹崎さん：赤十字の旗は配った写真のほうにも写っている。

奥本さん：日銀はすごい丈夫だった。２階と３階は焼けてしまったが、地下と１階は大丈夫だった。原爆投下後５日目ぐらいから、１階で通帳とかがなくても自己申告で金を引き出せるようになった。そのおかげで自分もだいぶ助かった。

１班の発表　　発表者：池田

発表は３班と同じような形式。以下抜粋。

池田：地下通信壕では韓国人のツアーがいたが、ガイドさんがうるさかった。

奥本さん：地下通信壕は普段は扉が閉まっていて入れない。普通は８月６日だけしか開いていないはずだと思う。

大野先生：韓国人のツアーがいたから特別に開けていたのだろう。ラッキーだった。

奥本さん：広島城は当時はもっとすごい大きかった。豊臣秀吉も絶賛したらしい。やけずに崩れ落ちただけですんだ部分があったのだが、燃料として燃やされてしまったようだ。

奥本さん：アメリカ人捕虜がいたところもあり、そこも被爆した。捕虜は相生橋までは逃げ延びたが、そこで市民に見つかって針金でグルグル巻きにされて電信柱に縛り付けられたらしい。自分はその光景は見ていない。

発表が終わった後、途中まで奥本さんと一緒に宿に帰宅した。

＜３日目午後の感想＞

8/8午後　奥本さんの話（宇野　將至）

私たちにとって、被爆者の話を直接聞く初めての機会となった。奥本さんは、被爆したときの体験を誰かに語ったことがなかった。それなのに、今回私たちに体験談を聞かせてくださったことに、心から感謝したい。伝えてくださったことの中には、本当は忘れたいようなこともあったと思う。だからこそ、非常に重みのあるお話だった。私がまず感じたのは、リアリティだったように思う。これはあの戦争に関する、リアリティをもった情報だと感じたのだ。もちろん第二次世界大戦については小学校以来学んできた。開戦の理由、参戦国、主な戦場、敗戦を迎える経緯、GHQによる占領などのさまざまな情報。私たちは皆、教科書に載せられた文章や図版、あるいは映像資料などでそれを得てきた。それで「第二次世界大戦とはなにか」が分かったと、ある意味で感じていた。だが、言ってみればそれらはすべて「加工された」情報だ。だから、抽象的で、時に無機質的だと感じるときがある。もちろん、映像情報の中にはたいへん具体的に、戦時下の状況を克明に伝えるものもある。それでも、なにか距離があるように思ってしまう。それに対して奥本さんのお話は心に響いた。自分から五メートルも離れていないところで、原爆を投下された瞬間に生きていて、その目で見た人が、ぽつりぽつりと言葉を落としていく。もともと語り部でない奥本さんは、流暢に体験談を語る人ではなかったが、全員が聞き入った。あの不思議な時間は、本当にかけがえのないものだと、確信をもって言える。今回いろいろ考えた末、「私がまず感じたのはリアリティだった」と表現した。だが、本当はこんな一文で表すことはできないとも思う。感情をうまく言葉に出来ないと思ったのも、久しぶりだった。

広島に行って（佐藤　薫）

フィールドワークで広島をめぐっていて感じたのだが、広島という街には、本当に至るところに原爆にまつわる碑などがある。平和記念公園やその周辺にそうしたものがあるのは当然といえば当然だが、そうではないごく普通の街の中、生活を送る空間の中にも碑などがちらほらと見受けられる。それらは自然に風景の中に溶け込んでおり、広島という街がまさに反核・反戦争という意識のもとに建て直されてきたのだなと感じる。

灯篭流しについてもそうだ。僕らは旅行の初日に灯篭流しを観にいったのだが、そこには当初予想していた厳粛な空気は流れておらず、ほとんどの人は普通の祭りとして楽しんでいるように感じた。願い事を書いた灯篭を流せばその願いがかなう、といったものさえあった。こうしたことを非難する声もあるだろうが、これは逆に言えば原爆というものが本当に自然に、市民の方々の生活や慣習の中に組み込まれているということの表れでもあるのだろう。東京では、そうした戦争の碑や慣習などを目にすることはほとんどない。東京も、戦争では東京大空襲など多くの被害を受け、戦後に街を作り直していったという歴史がある。それに

も拘らず、戦後の都市設計において、広島とこうも差が出てきたというのは興味深い。まさに「経済都市」東京と「平和都市」広島の違いというのをよく表しているように感じる。もちろんこれには多くの理由やそれぞれの必然があったのだろうし、どちらが良いなどとそう簡単に言うことは出来ないが、戦争の記憶を残すという観点においてのみ見れば、広島のほうがはるかに優れている。僕達高校生にしてみれば、戦争というのは歴史上の出来事でしかなく、それについて知識を得ることや考えることはできても、身近に経験することはできない。だが、今回広島という街に行き、その土地に触れてくることで、戦争・原爆に対してより皮膚感覚的な体験ができたように思う。これは、東京では不可能なことだ。だが、これは逆に高校生が戦争の感覚を共有することの限界を示しているようにも思う。広島に数日滞在するだけで東京で勉強するだけでは感じることのできなかった体験的感覚を持てたのだから、実際に戦争を経験するというのはどういうことなのか、実際に戦争を体験した人々はどれほどの感覚を受けたのか、それはおそらく計り知れないものであろうし、我々にはそれを完全に理解すること、感じることはできないだろう。そして、だからこそ、完全に理解することはできないからこそ、少しでもその感覚に近づこうとする必要があると思うのである。そのためには、ちゃんとした知識を多くつけていく必要があるし、勉強だけではなく実際の戦争を感じさせるものに肌で触れていく必要がある。それを考えると、広島という街は素晴らしいのだな、と思う。おそらく東京にいてはそれは無理であろう。そこに東京の高校生の限界を感じる。だが、そうしたことを踏まえたうえで、それでは我々には何ができるのか、という事を考えていくのが大事なのだろう。広島に行って、ぼんやりとそんなことを思った。

4　おわりに

以上、生徒が記した行動の記録と各訪問先、体験先での感想をのせた。今回の実習を通じて、東京近辺で生まれ育った彼らにとって被爆地での観察や聞き取り、交流がさまざまな思考をもたらしたことが確認できた。教室の中で繰り広げられる授業よりも実際の体験が大きな意味を生むことが実証されたように思えた。一方で今回の実習を真摯にとらえればとらえるほど、課題も大きくなったことがわかる。

広島は、原爆という科学の「成果」が人類に何をもたらしたかを現実に示した、「科学と戦争」「科学者の社会的責任」を象徴する場所である。同時に、原爆の開発と投下から半世紀をこえ、今日、核兵器をめぐる課題は科学や科学者のあり方にとどまらず、当然、それを制御する政治や社会の問題になっている。生徒の関心もこの点が強くなっており、「核抑止論をどう考えるか」「核兵器廃絶はどうすれば可能か」というような、核兵器を現代の問題としてどう捉えるかという議論が何回かおこなわれた。本校では、高２から高３にかけて各自がテーマ研究に取り組む。広島実習参加者の中には、科学者の関わりを調べる生徒もいるが、さまざまな体験が何人かのテーマに反映していることも特徴である。また、そもそも戦争とはということも大きな関心となっている。具体的には以下のようなテーマがあげられている。

・小林、西岡「核の国際管理について」―原爆を開発した科学者が、核開発競争の危険性を感じて核の国際管理を提起した。それがアメリカを中心にどう受けとめられ、どうなっていったかをみる。

・宮沢「2008年における広島の原爆報道を考える」―原爆報道は、核についてのひとびとの認識を形成する上で大きな影響を与える。それが、広島という地域でどういう特徴をもつかを追う。

・西岡、開出「これからの日米関係」―核抑止論をどうすれば克服できるかを考えると、日米関係にいきあたる。オバマ政権誕生という中で、現実にどういう日米関係が可能なのかを考えてみたい。

・池田「核戦略の変遷とそのあり方」―理想論であっても、核兵器を廃絶すべきということを追及したい。国際政治の課題であり、核戦略がどう進められてきて、今後はどうなるのかを考える一歩としたい。

・宇野「敗戦国に対する統治組織―占領軍は何を残したか」―核を使って戦争に勝ったアメリカが、日本をどう統治して、その影響はその後どうなってきたか。

・河合「第二次世界大戦時の東南アジア」―第二次世界大戦中の、大東亜共栄圏を掲げた日本の東南アジアに対する政策はどのようなものだったのか。

・佐藤「戦争と経済学」―戦争は経済に何をもたらすのか。戦争の一種ととらえて、テロがもたらす影響も経済学で研究されている。現代の戦争と経済の関わりをさぐる。

今回の実習が論文の内容および、その後の進路選択等にどのような影響を与えたかについては、機会をあらためて報告したい。